

太陽の夜の航海



われわれは大人になったのだ。だからわれわれは地上の国を欲しよう。

∴

旅行に出て三週間がたちました。

エチオピアのタナ湖の北、ゴンダールという町にいます。17世紀、ファシリダス王国の首都だった町です。

そのファシリダス王離宮跡の芝生の上でこの手紙を書いています。

エチオピアに入国した日はちょうどクリスマスでした。

エチオピア正教最大の儀式「ティムカット」に合わせ、北部の古都アクスムに向かっています。

もうすぐ日が暮れる。

さっきファシリダス王城址の一角にある教会を散歩していたら、少年に声をかけられ、土曜日の学校の年長クラスに誘われた。先生は居ず、年長の者がリードして子供たちだけで聖書を勉強していく。アムハラ語が少しもわからないのが残念だった。

それでも明るい若い人たちの中に一緒に座っていられて幸せな時間だった。

エチオピアにユダヤ教が伝わったのは紀元前のことです。そしてシリア人によりキリスト教がもたらされたのが4世紀。古代キリスト教の面影を残しながら、エチオピア正教は現代まで連綿と続いている。その最も新しい世代がこのひとたちです。

最後に賛美歌を歌った。これにはぼくも少し参加しました。

今日、バスのチケットを買った。
明日の早朝にこの町を出て、アクスムの手前の町へ向かいます。

ケニアのナイロビで初めてアフリカを踏み、そこから陸路で北上し、赤道をまたぎ、国境を越え、エチオピアの首都のアディスアベバに着いたのはいまから、1週間前だった。標高2400mの高原にあるこの街の気候は、まるで秋のようだ。しかし日差しの強烈さはすぐに、ここが赤道からさほど遠くないことを思い出させる。アディスに着いたその日にちょっとしたトラブルに巻き込まれ、体調も悪くなり、少し気落ちして過ごしていた。この街には巨大なスラムが広がっている。いたるところに、乞食と不具者たらひ病者があふれるようにいる。表通りはごみにあふれ、そこから一步入った裏通りを描写する言葉は、少し思いつかない。

いつもと同じ、涼しく、日差しは強烈に照りつけるある日、バスのチケットを買うためにこの奇妙な街の中心部を横断した。外国人にヒステリックに浴びせ掛けられるやじを無視して歩いていても、汚物のようになってしまった若い女の乞食が
"Mister, I love you, kiss me"
と囁くのが耳に引っかかってしまうと、気持ちが少しざわつく。

アディスの街を見下ろす小高い丘の上には聖ゲオルギウス教会が建っている。エチオピア正教独特の円筒形のカテドラル。

その日、聖ゲオルギウス教会の門前には、いつもに増してすごい数の乞食と不具者が群れをなしていた。白い布をまとったとてもたくさんの人々が、強烈な日差しに照らされてこの巨大なカテドラルを何重にも取り囲んでいた。

目に見えるものは全て光と影のコントラストに切りぬかれ、時間も場所も定位を失いめまいするような光景の中にぼくはいた。
やがて、大きな日傘の下に立つ司祭が歌うように聖書を詠みあげ始めた。
そして人々は聖句を一斉に唱和し、何度も地面にキスを繰り返した。

糞尿の匂いさえ漂うなか、ごみを巻き上げる埃っぽい風の向こう、ぼくの正面に司祭がいて、この冗談みたいなまっ昼間に、当たり前の顔をした「地上の国」が寝転んでいた。
誰にでもなく、何にでもなく、どうでも、いつですらもなく、
ただ、いま、この場所で人が救われていく。
どのような物語もそこには入り込む隙はなく、それは確かに、目の前の現実のままに、ただその通りだった。

永遠にさえつなわれそうな当たり前の奇跡のなか、ぼろぼろ泣きながら人々と一緒に立っていた。
ずっとそうしていたいと思った。

今になってふと思うのだけど、アディスアベバの聖ゲオルギウス教会に立っていたあの時、もし、どこまでも高く明るいあの空から、突然何か降ってきたとしても、きっと特に不思議だとは感じなかっただろう。

今日、道端で十字架のペンダントをひとつ買った。
親指の爪くらいの大きさのいびつな黒い石に彫られた、エチオピアの十字架。

とても小さくて不恰好なそれは、ナイーブな無神論者の自分にはちょうどいい物のように思えた。

これを身につけてエチオピアの旅を続けよう。

今度教会に入る時は、人々と同じように十字を切り、
教会の門と地面にキスをしよう。

Gondar ETHIOPIA

すると多くの人々は自分たちの上着を道に敷き、
また他の人々は葉のついた枝を野原から
切ってきて敷いた。
そして、前に行く者も、あとに従う者も
共に叫びつづけた、

「ホサナ、
主の御名によってきたる者に、祝福あれ。
今きたる、われらの父ダビデの国に、祝福あれ。
いと高き所に、ホサナ」。
こうしてイエスはエルサレムに着き、
宮にはいられた。

∴

あれから少しいろいろなことがありました。
いちいち書き散らすと、また長い手紙になってしまうかもしれません。
しかしそうは言っても、何があったかなんて、考えてみればよくよとした小さなことばかりです。
そして、君に宛てた手紙に書きたいことなんて、だいたいがそんなことなんだ。

アクスムには1月15日に着いた。
ティムカットは、エチオピア全土の教会で18日から19日にまたいで行われます。
アクスムには旧約聖書に出てくる「アーク」が納められているという新、旧、二つのシオンの聖マリア教会と、他にも驚くほどの数の遺跡群と教会が散在しています。シェバの女王以来、2800年かそれ以上にわたって何らかの王国の首都だったのだから、当然と言えば当然なのだけど。いまは静かで小さな田舎町です

アクスムに着いたその日、午後から広場の木の下に座っていました。集まってきた子供たちと色々と話をしていると、
そのうち子供のひとりが「デブラ・ダモは知っているかい？」と聞くので驚きました。
君がぼくに教えてくれた、あの本に出てきたジャーナリスト。彼が生前にデブラ・ダモについて書いた文章をコピーして僕はこの旅行に持ってきている。
デブラ・ダモは周りを断崖に囲まれた台地で、そこには6世紀に開かれた教会と修道院がある。
そして修道士達は、何年、何十年と天空の台地から下界に降りることなく、神との対話に日々を過ごしています。
そこはエチオピア正教至高の聖地です。いずれにせよデブラ・ダモに行くかどうか決めるのはティムカットの後にしようと思いました。

明日はティムカットの1日目です。
夕方になると聖マリア教会からタボットと十字架が行列になって出発し、シェバの女王のプールに隣接した小さな教会のテントに入り、そこで、一夜を明かします。そしてその夜、エチオピア中で同じことが行われます。
全ての教会からタボットが運び出され、水の近くの仮説の祭壇に一晩安置されます。

タボットとはエチオピア正教の「御神体」で、モーゼが神から授かった十戒が刻まれた石版を取めた聖櫃（アーク）です。その本物がこのアクスムの教会に実在するのではないか、というのは有名な話です。

このシェバの女王のプールというのは、長さ50m、幅15mほどの人工の池です。

少し小高い丘になったところにあり、片側はプールの縁から上へ、崖のようになっています。
プールの縁から水面までは7～10m程の急斜面になっていて、水面に降りる広い階段が1箇所あります。
このプールの水を多くの人が生活用水として利用しています。
荒地に突然姿を見せる、水をたたえたこの池は美しいです。
乾燥した高地が続くエチオピアの風景は、モーゼがイスラエルの民を率い、40年間放浪したという土地を連想させます。
アクスムもまたそのような土地です。見渡す限りの荒地が広がる聖地です。

ところで、君と一緒にいた時にそうだったように、ぼくはこの旅行でも写真を撮ることの意味や理由を見つけられないでいます。

目の前にある「とても遠いもの」に、漫然とカメラを向ける勇氣はなかったし、また、そうしてしまうことを、いまは以前にも増して怖いと思う。

写真に写っている物なんて、それが一体何なのだろう。

正直なところ、外国人ツーリストの多くは時折、とても醜く見える。そして自分もまた、そうした外国人旅行者のひとりであるという限界の中でしか、目の前の世界に出会うことはできない。

こんなナイーブに小さなことを気にしているのを、確かに自分でもぼかぼかしいと感じることはあるよ。でもね、ひとの大切な何かを土足で踏みにじっておいて、それに気付かないでいるよりも、少しばかに見られるぐらいにいるほうがよほど幸せなことじゃないだろうか。

タイムカットの当日、ぼくは夕方まで仮眠をとり、防寒用にベッドのシーツを剥がして体に巻いて出かけた。
シーツは白いガーゼ地で、ちょうど巡礼の人々が身につけているものによく似ていた。

教会の方へ歩いていくと、人の行き交いが多くなり、シェバの女王のプールのほうに人が集まっているのが見えた。行ってみるとすでに、たくさんの人が集まっている。プールの階段のあたりでは人々が熱気をはらんで太鼓を叩き、歌を歌っている。小さい教会の方を見ると、今日の昼まで誰もいなかった敷地内にたくさんの人がひしめいていた。

やがてすぐに日が暮れて、急に寒くなってきた。

ぼくは暗がりに行って、持ってきた白い布を人々のまねをして頭からかぶった。

これで顔まで覆ってしまえば白い顔をした東洋人も少しは目立たないだろうと思ったのだけど、それは甘かった。

気がつくといつのまにか、20人ぐらいの子供がぼくの周りに集まってきて座っていた。

教会の敷地内はライトや灯油ランプで照らされている。

テントの中、仮設の祭壇にタボットが安置されている奥の部屋では、司祭による聖書の朗唱が延々と行われ、その声がテントの外まで聞こえてくる。手前の部屋では、ときおり儀礼用の鈴と杖と十字架をもった司祭達による、聖書の朗唱と単調なダンスが行われていた。

人々はテントの前に集まり、それぞれ思い思いに、祈ったり座りこんだりしていた。

やがて何の合図があったのか、ぼくの周りに集まっていた子供たちはいっせいに敷地の一角へ移動し始めた。ぼくも子供たちと一緒に連れて行かれた。

大きな岩（と言っても地面はどこも岩なのだけど）の上に100人ほどの子供が集まっている。若い青年がみんなに今夜の心得と、そして説教をする。

やがてドラムが担がれ、ドラムと手拍子の伴奏の賛美歌が始まった。ゴンダールの教会の学校で聞いたのと同じものだった。

それから、とてもたくさんの賛美歌が歌われ始めた。

「ハレルヤ」以外の歌詞はわからないけれど、時折「マリア」や「ヨハネス」という語が繰り返され、この歌が聖人を称える歌であることがわかる。この岩の上からは、敷地の全体とシオンの聖マリア教会へ続く道を見渡すことができ

きる。やって来る人と帰る人がさかんに往来しているのがわかる。ふと教会の敷地を見渡すと、いつのまにか、とてもたくさんの人々がこの敷地にあふれだしていた。（彼らは食事をとっていない。教会に来る人は食事をとらずに来る。）

ぼくのまわりで湧きあがっている歌と手拍子はだんだん熱気をはらんできた。人々はまだ、次々とやってくる。子供たちはバラバラと木の下に殺到し、手をつけられないような勢いで、終わらない歌を歌い続ける。

子供たちの数は、もう200人をこえている。敷地は人々がまとう白いロープであふれている。

隅のほうに座っていたぼくは、指揮していた青年にうながされて木の真下、つまりみんなの真中に座らされた。アムハラ語で話される青年の長い説話も、聖書の朗唱も、賛美歌の歌詞も、ぼくには一言もわからない。

自分は、この時間、この場所に居て、一体それの何を理解しているといえるだろうか。何か、とんでもなく愚かなことをやっているのではないだろうか。話し掛けてくれる青年達に、ここに居てもいいのかと、尋ねずにはいられなかった。ぼくがここで確かに感じとれたものは、歌をうたう子供たちの力強い歓喜だけだった。

夜も更けてきて、説話の間に少しうとうとする子供もでてきた。

指揮をする青年はあいかわらず情熱的だが、子供たちの歌は少し勢いを失ってきた。眠ってしまった子供たちを他の青年がこつこつ起こして回っている。ぼくは子供たちから離れて、岩の上の暗がりに登った。岩肌には白い布に繭のようにくるまった人々が眠っている。ぼくも少し眠ろうと思ったが、乾いた風はとても冷たく、岩は硬い氷のようだった。とても眠るどころではなかった。帰ろうと思った。

その時、ひときわ明るい光がテントの周りをめぐり始めた。

よく見るとそれは、仏像の光背のような細かい直線の彫刻を施した、大きな美しいエチオピアの十字架だった。その金色の十字架が明るい灯油ランプに先導されて輝きながらゆっくりとテントのまわりを一周する。後ろには赤いピロードの美しい傘を持った司祭を従えている。やがて十字架はテントの中に消え、今夜何度目かの司祭たちのダンスも終わり、再び聖書を朗唱する声だけが夜の中に響いていた。

やがて人々の間にろうそくが配られていった。次々と火を分け合うようにしながら、ろうそくが灯されていく。後ろを振り返ると、岩肌にはりついた人々の間にも、もうすっかりろうそくは行き渡り、この小さなテントはおびただしい数の灯明に囲まれていた。灯明の海に浮かぶ白い小さな船のようだった。

ろうそくを配っていた少年がぼくを見つけ、火のついた一本を差し出す。全員には行き渡っていないろうそくを、ぼくが持つわけにいかず断ろうとすると、まわりの人々が、持ちなさい、と言うようなのでその一本をもらった。

灯明が消えてしまわないように大事にそれを持ち、火が消えてしまったひとに分けてあげられることがとても嬉しかった。やがてだんだんと灯明の数は減り、ぼくの持つろうそくも短くなった。そしてついに、それも風でふと消えてしまった。そして、まだついている人から火を分けてもらおうと歩き出した。

その時近づいてきたひとりの青年に、あなたはここで何をしていますか、と尋ねられた。ぼくが弁明めたことを何か言おうとすると青年は、いえ、あなたはここに居てもかまわないでしょう。ただ、アムハラ語はわかるんですよ、と言う。

いいえ、わかりません。

青年は何か言いたそうにしたが、まあ勝手にしなさいというふうに行ってしまった。ろうそくはとても短くなり、持っていられなくなったのでぼくはそれを捨てた。

朗唱は続き、人々は祈り、子供たちの歌はなぜか再び勢いを取り戻している。

でもいまそれは、何かとても遠いものを感じた。

あの中に入り手を叩き、体をゆすり、歌をうたう気には、もうなれなかった。

時計を見ると4時になっていた。

寒さはいよいよひどくなってきて、今度こそ帰ろうと思った。

でもぼくは、布にくるまって岩の上で少し眠ってしまった。

.

小さな男の子たちに、起きなよ、と小突かれて起こされた。

まわりで寝ていた人たちは一人もいない。まだあたりは真っ暗だったが、眠る前と何か違っていった。あたりの空気がしんと張り詰めていた。

まっさらな夜の下で、人々は若い司祭の情熱的な説教に熱心に聞き入っていた。

夜の大気が、だんだんと張り詰めていくのが感じ取れた。

丘のふもとのほうからは白いローブの人々が、次々と登ってくるのが見えた。

怖いくらいの数の人々がこの小さな教会に集まりだしていた。

やがて夜が明け、日が昇り始めた。

テントの前では正装の司祭による祝詞があげられ、あたりは白いローブの人々で埋め尽くされていた。

美しいHolly Nightは去り、キリストの洗礼を記念する儀式、ティムカットが始まっていた。

しかし実は、その日の朝のことはなぜかあまり詳しく覚えていない。思い出そうとしても少しぼんやりとして、ただ忘れられないいくつかの瞬間と、その強烈な印象だけが焼け付くようによみがえってくるだけなんだ。

山間から顔を出した太陽はすぐに北緯14度の力を取り戻し、あたりは横殴りの強烈な光に満たされた。小高い岩の上からは、白い布の人々が教会の敷地に入りきれず、シェバのプールの前にまで溢れ出しているのが見える。もしかすると、このときにはもう敷地に入りきれない人々の方が多かったかも知れない。

人々の唱和と祝詞が続いた後、急に群集が動き出した。テントからあの大きな金色の十字架、それに付き従う赤いビロードの傘、そのほかの数種の神器とそれぞれに付き添う傘が列をなして出てきた。

敷地の中にいた人々は節度を保ったまま、門に殺到し始めた。

神器を掲げた司祭たちの一行は教会の門を出て、シェバのプールの脇の広場までゆっくりと移動し始めた。

茶色の岩肌とそれを埋める白いロープの人々の中を進んでいく、金の十字架。赤に金糸の刺繍の傘。そして正装の司祭たち。それらが、光るように鮮やかに見える。

人々はプール脇の広場を中心に、この大きな人工池を埋めるように取り囲んでいる。

ぼくも教会から池へと続く、崖のような斜面へ移動した。

ほどなくして座りこんでいた人々も立ち上がり、全ての人が広場の方を注視する。

池の全周はすっかり人々に覆いつくされ、ぼくの立っている斜面もこぼれそうなほど、びっしりと人が詰め寄せていた。人々は長い長い祝詞と朗唱にあわせ、一斉に所作を行い、「アーメン」を唱える。そして、読み上げられる聖句をまるで身に染みこませようとするかのように、静かに立ち尽くしている。

時折、唱えられる聖句をさらに祝福するかのように、女性たちの間から「ホロロロロ…」と、高く舌を震わせるような呼び声があがる。司祭の声以外は何も聞こえない静寂の中、突然地面からこの呼び声が無数に湧きあがり、カンカラの青空にやわらかく響きわたるのだった。それは天の眷属の歌声のようだった。

突然、教会の方から人垣を抜け、30人ほどの子供たちが転がり出すようにして現れた。

昨夜一晩中、情熱的に子供たちをリードし続けた指揮の青年と、ドラムの青年も一緒だった。

ただ昨夜とは違い、青や緑や白の素晴らしいデザインの衣装で、全員が正装していた。

帽子とからだの前面に、大きく金糸で十字架が刺繍されている。

彼らがシェバのプールの水面へ降りる階段に並ぶのを見て、斜面を駆け下りた。

警備の警官に押し返されても、彼らの姿が見える水際へ少しでも近づこうとした。

それから彼らが歌いだした。

手をたたき、体を揺らし、歓びに弾けるように

あの終わらない歌を歌いだした。

この池上の空間を、もうこらえきれない歓喜で満たそうとするかのように、声を張り上げ、からだを震わせる。昨夜一晩中続いたあの歌の力が、まるでほんの軽い冗談だったかのように、いまはこの30人が全力で神を称え、歓喜をあたり一面にぶちまける。

そしてその時、辺り一面からいっせいに湧きあがった天の眷属の歌声が彼らを支え、祝福する。

それがどのくらい続いたのだろうか。

歌は止んでいる。

斜面の上からは人がばらばらと降ってくる。岩肌の斜面の足場にいる人々は明らかに殺気じみてきている。このままこの水際には少し危険だった。広場の方を見ると、人垣の向こうを、傘の先端が教会の方へ移動していつているのが見える。

やがて十字架と傘は、階段の両側に並んだ聖歌隊の間を通り、ゆっくりとプールの水面へと降りて行った。

十字架が水際に到着し、人々は再び静まり返った。

しばらくすると水面が静かに波打ち、火のついたろうそくを立てた土塊が水面にそっと押し出された。

そして、深い静寂の中、十字架が池の水に浸された。

それから、ゆっくりと十字架が引き上げられた。

そして、人々が、
すべての人々が水際へ殺到した。
祝福された水を手に取り、洗礼を受けるために。
先に水際に辿りついた気の利いた連中がポリタンクに水をすくって後ろの大群衆にぶちまけだした。
頭に、額にしたたかにその水をくらった瞬間、何かが弾け飛ぶようにこみ上げた。
見えなかった目が開いたのかと思った。
自分に何が起こったのかをいう言葉を他に思いつかない。目が開いたと思った。
あの時、その感覚こそがリアルだった。
狂喜の大群衆の中、頭からずぶ濡れで、ちょっと泣きそうなくらいに幸せだった。

やがて、テントに安置されていたタボットが運び出され、聖マリア教会へと向かい出した。

子供たちの聖歌隊がタボットを先導し、手を叩き、歌をうたい、道を清めていく。

大群衆に取り囲まれたタボットの一行は、たくさんの司祭を引き連れ移動し始めた。

途中何度も立ち止まり、司祭たちは杖とシストラムを持ち古式豊かに謡い、ゆっくりと踊る。
タボットが動き出すと、子供たちが先頭に立ち、賛美歌を歌いながら大群衆を先導する。
彼らは歓びに弾けるように歌い、跳ね、そして手を叩く。
爆発する歓喜と荘厳な静寂を交互に繰り返しながら進むパレード。

ひとつだけ知っているグレゴリオ聖歌のフレーズが駆け巡った。本当にその通りだった。無敵の神の軍隊。何も恐れない、何も彼らを脅かすことはできない。大きな勇気に満ちて彼らは進む。

やがて大群衆はシオンの聖マリア教会の前に到着した。

子供たちの歓喜の歌声は最高潮になる。司祭が謡い、説教をする間だけ、子供たちは沈黙する。

そしてタボットが再び動き出し、やがて教会の中へと消えていった。

タイムカットは終わった。

子供たちは広場の大木の下で、まだ終わらない歌を歌いつづけている。

大群衆はもういない。
巡礼者も帰途についた。
それでも子供たちは歌うのをやめない。
やがて子供たちは、教会へと向かいだした。そして教会の門の下で、昨夜から何度も歌われたあらゆる歌を再び歌いだした。
やがて青年が短い説教をし、そして「アーメン！」が一度だけ、力強く唱和された。
そしてついに子供たちは解散した。

子供たちと20時間以上、一緒にいた。彼らは何も飲まず、食べず、そして眠らなかった。ただ、歌い、歓びを叫び続けた。

教会へと続く道を、子供たちと一緒に進みながら、ずっと考えていたことがある。

キリストのエルサレム入城。それはまさにこのような光景ではなかつただろうか。

この子供たちは、キリストがエルサレムに入城する時もそこにいたのではないだろうか。力の限り歌をうたい、道を清め、あふれる歓喜とともに、ロバにのったキリストと大群衆をエルサレムへと導いていく。

そうだ。きっと、そうだったにちがいない。

聖なるかな、聖なるかな、万軍の神なる主よ

Axum, ETHIOPIA

アフリカと中東を少し長く旅していた時、町で、砂漠で、荒野で、人々が祈る姿を日常的に見かけた。

それはひとりひとりが働く手を休め、自分自身へと立ち返り、世界との孤独な対話を交わし始める時間だった。そしてそのようなことをするための場所を、人々は無造作とも思えるほど簡単にすばやく、地面の上のどこにでも見つけ出すのだった。

「真実」や「正義」などというものに気恥ずかしさや不信感、さらには嫌悪さえ抱いている自分は、祈りはおろか、そのための場所を見つけることすらできずに生きている。

私が生きるこの街と同じ夜の半球に眠る、飢え、殺し、愛し合う、見えない百万の人々の上に、百万の今日が、また来る。

∴

アクスムで偶然、あのジャーナリストのデブラ・ダモ取材に同行したというガイドに会った。彼が飛行機事故で亡くなったことを伝えたと、それまでのツーリストガイド風情はどこかに消えて、なんだかとても申し訳なさそうにするのだった。

ティムカットの後、デブラ・ダモへ向かうのは何か当然のこのように感じていた。

ビゼットという村には昼に着いた。人に尋ねると、村から6〜7km道路を歩いたところにダモへの標識が立っている、とのことだった。そこから山道に入って行くらしい。明日はまだ暗い時間の出発になるので、標識の所までは明るいうちに確認しておこうと思い、出かけた。村を出てすぐの所にある水汲み場で、5リットルタンクを2つぶら下げた男の子に「ダモに行くの？」と声をかけられた。彼も行くのだと言うが、ダモの小僧さんは山から降りられないと思っていたし、そもそもダモには天水をためる穴があると聞いている。もし水不足なのだったらこんな量では到底足りないだろう。やがて分岐にさしかかり、少年は標識の手前を曲がる近道を教えてくれた。遠方にダモ山が見えてきたので、少年に「明日ダモまで行きます」と身振り手振りで伝えて引き返した。

翌朝、日の出の一時間前に宿を出た。暗闇の中を歩くのは少し心細かったが、昨日少年に教えてもらった曲がり角も過ぎ、山道へと入って行った。かなりきつい山道だった。すぐに息が上がり手足がむくみだすのを見て、ここが標高3000mを越えている事を思い出した。少し歩いてはへたり込みながら川や谷をいくつか越えて、ようやくデブラ・ダモが近くに見えるところまで辿りついた。そこは高さ50mあまりの険しく切り立った岩の台地だった。たくさんの人々が、岩肌の裾野に張り付くようにして集い、祈り、歌っている。人々が見上げる岩山の上からは、一本のロープが下がっていた。足が止まってしまった。来て良かったのだろうか。ぼくを見つけた人が手招きをしてくれたので台地のふもとまで近づいた。そして、人々に促されるままに、皮をより合わせたロープをつたい、崖を登った。

この垂直の道は、ここまで歩いてきた5時間の山道をしのぐきつさだった。やっと辿りついた中ほどの足場で進退きわまっていると、アクスムで聞いた、あの「ホロロロ…」という声が聞こえてきた。下で祈っていた女性たちが、途方に暮れているぼくを励ましてくれているのだった。もし落ちたら、無事では済まないだろうと思い足がすくんでいったのだが、あまりに恥ずかしかったので、残りを一気に登りきってしまった。

ダモの風景はジャーナリストが書いていたとおりであった。6世紀に建てられたという教会があり、石ころを積み上げただけの家々が続いていた。

黒人霊歌に歌われる聖地、約束の地を求め旅する荒野のただ中にある、神へと通じる高みだった。

何も無いという意味において、ここは絶対的だ。

それは「物」についてのことではない。ここにいる人々、ここにある時間、そして石を積んだだけの建物。

触れようとしても、何にも触れられないように思えた。全ては、この吹きすさぶ風と同じだった。

昨日の水汲み少年に再会した。彼がぼくを見つけて走ってきてくれた。昨日彼が運んでいた水は、体を壊した修道士のためのものだった。

地面を掘った穴に雨水をためただけの不衛生な水は、病身には受け付けられないのだろう。

少年はザカレアスという。彼がぼくを招いてくれたので、彼を含め10人くらいの小僧さんが暮らす小部屋に落ちついた。

実は、テントを戸外のじゃまにならないところに張らせてもらおうと考えていた。それは、彼らの前で荷物を解くわけにはいかないと思ったからだ。

何も持たず極限まで質素に暮らす彼らの前では、持ってきた非常食のような食料ですら、取り出すのはためらわれた。

子供たちの間に汚い山羊皮の袋が持ち出され、中からいつのものかもわからないインジェラが取り出された。埃を払い、塩を振り、みんなで食べ始めた。

ぼくも勧められるままに、そのインジェラを一口食べ、テッラという藁を発酵させた泥色の飲み物をすすった。飲み下す思いきりがつかず、いつまでも嘔み続けた。

子供たちを指導する修道士に聞いても今夜はここに寝泊りしていいと言ってくれる。しかし夕方近くになって外を歩いていて、言いようの無い不安がこみ上げてきた。

なぜここに来てしまったんだろう？自分は大切な物を何ひとつ見ることも出来ず、ただ動き回るだけで、白い磁器に入ったひびのようにこの場所を汚しているのではないだろうか。そしてそのひびの醜ささえも、自分では見ることが出来ずにいるのではないか。ぼくは人々の好意の意味や価値に全く触れられないでいた。

ザカレアス達の暮らす家にもどり、彼らが部屋の片隅で聖書を学ぶ声を聞いていた。

毎日毎夜、このようにして語られ続ける言葉、そして、彼らの苦しみや悲しみ、この極限の生活を支える歓びを聞き分ける耳をぼくは持っていない。

夜、凍るような月の光の中、持ってきた食べ物を隠し持って外に出た。吹きすさぶ風の音に混じって、どこからか子供たちの歌う賛美歌が聞こえてくる。

すぐ足元には、岩の台地を取り巻く垂直の崖があった。鳥以外のどんな動物も、連れてこられるので無い限り、ここに来ることは出来ない。

あのロープだけが下界と連絡する唯一の道だった。6世紀の昔からこの生活は変わることなく続いてきたのだろう。

台地の外には年月に侵食された山や谷が延々と連なり、月光に照らされていた。

岩の陰に座り、果物の缶詰を開けながら、夜が明けたらすぐにここを出ようと思った。

翌朝、少年たちは教会へ出かけた。

食事当番の少年が一人残り、粉を水で練っていた。ぼくはこの少年に持っているだけのキャンディーを渡し、ザカレアスやみんなに分けてくれるようお願いした。

彼らにキャンディーを与えてよかったですか。この少年はみんなに配ってくれるだろうか。確かにわかることは何も無く、何一つ学ぶための言葉もぼくは持っていなかった。ロープをつたい、山を降りた。

下に着いて、デブラ・ダモを見上げると、昨日この場所に立ったときと同じように、静かな興奮を感じる。昨日と同じように、膝をつき台地の裾にキスをした。だけど今、この上には何も無いことをぼくは知っている。この上で自分は何も見ることが無かった。きっと、ぼくは目が見えないのだ。5時間歩いて村に戻った。

Bizet ETIOPIA

私たちが光を見ることができるのは、ただ私たちの感覚がそれを感知するからではない。
絶望の内にあるとき、私たちは見るができない。

光とは、生きようとする私達のエロスが、世界へと這い上がるために
手に掴んだつる草のことではないだろうか。

∴

エチオピアからエリトリアの国境へ向かうには、途中のアディグラットという町でバスを乗り換えます。
ぼくはアディグラットで一泊するつもりだったのだけど、バスの車掌は、「国境に直行するバスがある。それに乗れば今日中にエリトリアに入れるからそうしろ。」と言って聞きません。で、彼が親切に教えてくれたバスに乗ったのはいいのだけど、そのバスはやっぱり日中に国境にはたどり付かなかった。
結局、予定外のザランバサという町に泊まる羽目になった。

ザランバサに一軒だけの宿は、清潔でいい感じでした。
ぼくはデブラ・ダモの水で具合を悪くしてしばらく絶食していたのですが、ここで遅い昼食をとることにしました。

いつも食事を頼む時はキッチンの中まで入って行って注文しています。言葉のせいもあるけれど、それより、ぼくはそういう風景を見るのがどうやらとても好きらしい。
勝手に宿のキッチンに入っていくと、中にいた若い女の人に随分驚かれた。しかし、注文した料理を食べ終わって「コンジョノウ（おいしかった）」と声をかけると、彼女はとても喜んでくれた。
料理を食べるために使って汚れた手を洗いに中庭に出ると、ちょうど家畜を解体しているところだった。

もう首ははねられ、皮も剥がれていたのだけど、中庭でめえめえ鳴いている何頭もの動物を見る限り、この肉塊もさっきまでは二頭の山羊だったらしい。解体をしている青年のそばに控えている男の子の足元には、内臓が山盛りになった大皿があった。
やがて二頭目の動物の腹からもレバーやら何やらが、どっと出てきて、男の子がそれをキッチンへ運んでいった。

キッチンでは早速、女の人たちが野菜を炒め、内臓を選んで刻み始めました。
すぐに、タマネギ、青唐辛子、塩胡椒、バルバラ（乾燥トマトを粉末にした調味料）が入った山羊のレバー炒めができあがった。

誰がこんなにタイミングよくこの料理を注文したのか、と思っていたら、料理するのを横で見ているぼくに「食べるか？」と聞く。
驚いたけれど、ありがたく頂くことにしました。
さっき出てきたばかりの山羊の内臓は上質なレバーペーストのようだった。血抜きはおろか、水で洗いもしていないのに。

空いた皿をキッチンに戻し、お礼を言った。
キッチンの壁には、さっき手伝いの男の子が一生懸命運んだ肉塊がかけられている。

きれいな光景だった。
たった今、何かちょっとした大切なものを、さっと手早く隠したような光景だった。
カメラを持ってきて、写真を撮ってもいいかと聞くと、女の人たちは大騒ぎして片付けはじめた。
いや、そんなことはしないで、とお願ひしながら、数枚撮らせてもらった。
きっと何も写っていないような写真を。

タイムカットの日、
儀式は終わり、群衆が去った後も歌うことをやめない子供たちを、写真に撮った。

この旅行に出て初めて撮った写真だった。

ただ彼らが写ってさえいれば、それでよかった。
歓びを叫ぶように歌いつづける彼らの姿を忘れてしまいたくなかった。
ぼくが撮ったのは、美しくもなく、劇的でもなく
何が写っているのかすらよくわからないような写真だと思う。
そんなことはどうでもいいことだった。
あの時、写真を撮ることができて、本当によかった。

旅行をしていると、すぐ目の前にある物を、とても遠くに感じることもある。
そして初めて目にする物事をとても身近に感じることもある。

昔、"FAR AWAY, SO CLOSE"というタイトルの映画を観た。
映画の中では、この言葉が冒頭と終盤に二回出てくる。
映画作家は、このたった二言を言いたかったがために、映画を作ったのだと思った。

もしかすると、ぼくが撮る写真に写るのも、そのようなものではないだろうか。
とても遠くにあるはずの何かを、自分の近くに感じられることがあれば、幸せだと思う。
もしそんな時カメラを持っていたら、何枚か、何が写っているのかよくわからない写真を、
撮ったりするのかもしれない。

Asmara ERITREA

写真を無くした。
無くなったと思っていたのが、先日出てきたのだが
またどこにやったのわからなくなった。

半日探しまわった。
そうこうしているうちに当時のことが次々思い出されて、切なくなる。
写真は出てこない。

何だろう、この自分だけに大切なものは

∴

冷たい雨が降る中、公衆電話から電話をかけた。

本当は教えてもらった番号が間違っていたのだけれど、違う番号に立て続けに3回も電話してしまい、
しどろもどろになってお詫びもいえないうちに電話を叩き切られてしまった。

雨の中で途方に暮れていると、近くの石畳の上で大荷物を抱え、ぼくよりもっと途方に暮れている初老の婦人がいた。

手伝ってもらえないかと、少し泣き出しそうな感じで婦人がぼくに頼む。

ぼくは喜んで彼女の荷物を担いだ。

冷たく濡れるエルサレム旧市街を一緒に歩きながら、婦人はぼくに話しかけてくる。

ロシア語か何かで。神様のこと、教会のことやなんかを。彼女の大切な何かをぼくに伝えてくれようとするんだ。

やがて彼女が泊めてもらっている、アルメニア正教の教会に着いた。彼女は門前でぼくを抱きしめて、両頬にキスしてくれた。

なんだかひとは、不安の中において初めて目が開き、物が見えるようになるのではないかと思う。

なんてことはない人の気持ちや仕草が時々、とても美しく見えたりして、そして、それより大事なことや確かなこと
なんて世の中に

そうそうないんじゃないかって思うんだ。

この旅行に出て初めて撮った写真を同封します。

君への手紙に同封したくて、テルアビブの写真屋で現像したんだ。

現像されたフィルムは、傷だらけになっていた。

出来あがった写真を見ていると、あの夢のような瞬間がまた、やってくる。

写真に写っている彼らは、前夜から何も食わず、飲まず、眠っていない。

そしてこの青年は子供達を情熱的にリードし続け、喜びを叫ぶようにドラムを叩き賛美歌を歌い続けた。

ただどうしようもなく写真撮った。彼のことを、二度と忘れてしまいたくなかった。

いま、出来あがった写真を見ていて思うんだけど、ぼくはずっと、こんな写真を撮りたかったのかもしれない。

何が写っているのか、何を写したのかよくわからない、さりとて美しくも無く、何も特別な物の写っていない写真。

本当にこんな写真を撮りたかった。

ここには注意力のある人なら必ず気付く、確かに伝えられることがひとつだけある。
これは、ぼくが手を伸ばせば、触れることができたかもしれない世界だ。

ぼくはここにいた。

TelAvive ISRAEL

小学生の道徳の授業に「ケビン・カーター物語」という教材があるらしい。
そのお話は教室にどんな話題を提供するのだろう。

私たちの野蛮な無知についてだろうか
それとも、知る事の不可能について
伝える事の不可能について
私たちがほんとうに語れることは何もないということについて

ケビン・カーター 報道写真家 1994年ピューリッツァー賞 報道企画部門受賞。 4ヶ月後に自殺。

∴

本をありがとう。
君は知らないと思うけれど、君が置いていった本の何冊かを、ぼくは持っている。
旅行の荷造りをしていた時に、そのうちの1冊を何の気なしに荷物に入れたんだ。
英語の本だから、ぼくが読むには時間がかかって、長い旅行にちょうどいいと思ったんだろう。
君がこの本を原文で読みたくなった気持ちがよくわかる。この本の話はどれも本当にすてきだ。
中でも「for Ezume」は、とても美しい。戦争で身も心も「正常に機能」しなくなった兵士の元に、
何度も転送を繰り返した手紙が届く。その手紙を読んだ彼は、負傷してから初めて疲労を感じ、
そして深い眠りに落ちる。正常な機能を取り戻すために。

ぼくはエチオピアに行くまで、「ラスト・ファリ」が皇帝ハイラ・セラシエの本名だとは知らなかったし、イスラエルに来るまで、ジョン・ゾーンのグループ名「マサダ」が、ユダヤの古代の要塞だということも知らなかった。
ローマ支配に抵抗したユダヤ人は、各地で敗退し、最後にマサダに立て籠もって抵抗を続けた。
絶望的で悲壮な闘いに臨んだ960人は、1万のローマ軍との戦闘の末、全員が自害した。
そしてマサダ陥落をもってユダヤ人2000年の離散の歴史が始まった。
いまもイスラエル陸軍の入隊式はこの遺跡で行われる。新兵はここで、マサダを二度と繰り返さないことを誓うのだ。
自分の無知とナイーブさには、時々途方に暮れてしまう。

シリア国境に近いキブツで働いています。雪に覆われたゴラン高原が、ここからはよく見えます。

綿花畑で働いていると毎日、戦闘機や軍用ヘリが頭上を飛んでいく。

戦闘機が近づく時は、空気を切り裂くような爆音がする。
高度が高いので、空を見上げて姿は見えない。
ただ、広大な畑の緑の表面を、戦闘機と同じ大きさの黒い影が、凄まじい速さで走ってきて、
ばんっ、とぼくの上を通り過ぎていく。

ぼくの若い親方のユヴァール氏は足が悪い。兵役で軍にいた頃、訓練中に事故に遭った。
ユヴァールはこの農場のパワーショベルのオペレーターと仲がいい。このパワーショベルの男はアラブ人だ。
ある日、ユヴァールはこのパワーショベルの男がガザ地区から来たことを教えてくれた。
テロや紛争が報道される度に、ユヴァールはパワーショベルの彼のことを考えると言う。

畑の仕事はとても楽しい。灌漑設備の管理を任されて、自分用のトラクターを渡された。
もちろんここで行われているのは大きな資本を用いた大規模農業で、エチオピアの原始的で素朴なものとは全く違う。
今日は畑の中に標識を立てていった。これは農薬を散布する飛行機のためのもの。畑の一角では合成フェロモンを使った無農薬農法のテストもしている。
除草剤の使用を抑えているので雑草がはえる。雑草取りは手作業で行う。
先日の早朝、畑に入って雑草を退治していたら、危うく子ウサギ三羽の上に鍬を振り下ろすところだった。
まだ日の出の直後で辺りは夜露で濡れていて、子ウサギは寒くて動けないでいたらしい。

キブツには老人が多く住んでいる。

彼らのほとんどは、絵を描いたりしながらひっそりと暮らしている。
身体が自由が効かなくなって、とてもゆっくりと自分の食事を運んでいる姿を、ダイニングルームで見かけたりする。
彼らが50年前にこの土地に入植し開墾し国を作ったのだ。
誰もいなかった土地ではない。
過ぎ越しの祭りの日、ダイニングルームの壁を飾ったのはライフルと農具を交互に持ち替えながら必死で働く彼らの古い写真だった。
30年の独立戦争を経験した北アフリカのエリトリアは、いま、全ての人々が国の再建の為に喜びを持って働いている。
50年前、建国の事業に臨んだこの老人たちのひとりひとりを、内から燃やした思いとはどんなものだったのだろう。
食事の盆を台車に乗せ、ゆっくりゆっくり押して歩く小さい老婆を見ていると、その姿が何かとても堂々としているように思えてくる。

何が正義なのかはわからない。
それは本当にわからない。

Kibbutz Shamir, ISRAEL

写真はコーティングされた紙ではない。

映画は明滅するスクリーンではない。

それらは、光の国だ。

∴

深夜に宿を抜け出してピラミッドに登りに行った。

クフ王のピラミッドの頂上に辿りつき、やがて夜が明けてくると、すぐふもとに巨大な穴があいているのが見えてくる。

かつてその穴から船が出た。全長43m、排水量50tの木造船。

この砂の下にはまだ、発掘されていない大船団があるらしい。

太陽神ラーを乗せ、死と再生の夜と昼を航海する船団。

命あるものは全て太陽のように水から現れ、日暮れにはまた水中に没する。

人間は泉や河や湖沼から生まれ、死んでステュクスの川へ行き「夜の航海」に発つ

ステュクスの黒い死の水は命の水であり、死の冷やかな抱擁は母胎である。

海が太陽を飲みこみはするが母としてその胎内からふたたび生み出すように。

生命は死を知らない。

Dakar, SENEGAL

目を閉じても、世界は消えない。

∴

10月19日(日)

マリ国境に近い街、KANKANへ。

ブッシュタクシーである。

満載の荷物+ニワトリ数羽+18人、乗った。

繰り返すが車は7人乗りのプジョーである。

もう何も言うまい。

10月20日(月)

KANKAN滞在二日目。

宿はかつての駅前の立派なホテル。現在、外観は全くの廃墟と化している。駅は使われていない。

水は出るし、部屋もきれいなので別に文句はないが、つくづく変わった宿が多い。

先日は過ぎし日の独裁者の豪華な別荘に泊まった。

もちろん、廃墟だ。

今日で旅に出て10ヵ月たった。

学ぶこと、考えることは多い。

世界は多様だ。

そして大切なことは、それが、あたりまえにそうだということ。

どのくらいあたりまえなのかというと、それは言葉通り「想像を絶するほど」にあたりまえなんだ。

ぼくの言いたいことは伝わるだろうか？

大切なことなので、また書こう。

明日いよいよマリへ。

10月21日(火)

午後1時。

まだKANKANのブッシュタクシー乗り場を出発できない。

朝の7時からもう6時間、客が集まるのを待っている。今日中に国境越えはまず無理だろう。

国境で夜明かしになるかもしれない。

こんな非効率な世界の中を旅行していくのは楽ではないけれど、でも何て言えばいいのかな

いろいろな「あたりまえ」のなかに入っていくのはとても楽しいんだ。

そしてそれは、旅行をしていて大感動に出くわす、などということは、実はあまり起こらないってことでもあるんだ。

確かにぼくも旅の最初の1週間は驚くことも多かったけれど、それは世界を測るための「あたりまえ」の基準は変わることがないと信じていたからだった。

しかし今は、時間と場所で絶えず変化し続ける「あたりまえ」を柔軟に受け入れられることが出来た時、この恐ろしく多様な「日常」は、新鮮な奇跡の連続に変化する、ということに、ようやく気づき始めた気がする。

例えばね、びっくりするようなかっこいい髪型（でもそれがここでは普通なんだよ）のお姉さんが、売り物の野菜を山盛りに頭に載せて、鼻歌を歌い、腰を振りながら歩いていくんだ。

そして道を渡る時、立ち止まって、車が来ていないかを確かめるために、くるっ、とふりむくのだけど、その時頭の上で絶妙なバランスを保っている山盛りの野菜も一緒に、くるっ、とふりむくんだ。

もうこれが、この、くるっ、がぼくを打ちのめす。
体の奥から突然、むせ返るような幸福感が湧きあがる。

これは何だろう。

その場の光、空気、におい、風、音、といった何もかもが、この、くるっ、を全く完璧なものにしているんだ。どちらがどちらのためにあるのでもない。ただ、この瞬間、くるっ、であることがひたすらに完全なんだ。

こんな出来事が朝から晩までいっぱい起こる。

あたりまえだ。
あたりまえのことがあたりまえにあるって言っているだけだから。

さて、もう午後2時だ。いつ出発するのかな、と。

10月23日（木）

昨日、あれからどうなったか？

午後4時に出発。
9時間待ったよ。また記録更新だ。
やがてとっぷり日も暮れて、タクシーは悪路をひたすら走り続ける。

途中2回ニジュール川を越えた。
川を渡るのだからフェリーのはずなんだけど、フェリーはない。
丸木舟で人も車も渡すんだ。
丸木舟2艘を横に連結して板を渡し、その上に車を載せる。あまりのいい加減さに爆笑してしまった。

満天の星の夜、天の川の下を、丸木舟でニジュール川を渡った。
星空が水面に映り、まるで二つの夜空の間を船で行くようだった。

静かに音も光もなく、ゆっくりと進んで行く。

幸福に満たされるようだった。

そうこうしているうちに、国境の町に着いた。

夜の1時。さすがにくたくたになって宿はあるのかな、と思ったら、国境の手前で全員パスポートを取り上げられ、なんとその場で野宿である。

おいおい。

続きは明日書くよ。

Bamako, MALI

この街の高層ビルの展望台に登った。
日没直後のまだ赤みの残る空の下を、地平線まで埋め尽くす街の光。

サハラ以南で、岩山の上から見た夕景の地平線を思い出した。

全周の地平線に囲まれて、地面の上には自分ひとりしかいなかった

∴

昨日、ラジオを聞いていたら、スクリーミン・J・ホーキンスが出ていた。もちろん、フランスのラジオ局で録音された番組が流れていたんだろうけれど、少し驚いた。時折フランス語を交え、愛と生と死を説くホーキンスなのだった。

ベニンのブドゥーの大祭にホーキンスがゲストで出演したら、などと考えひとりで楽しくなった。

ベニンは都会だろうが田舎だろうが、昼の日中から「なまはげ」のものすごいのが、歌い踊る半裸のおばさん集団なんかが、どこからともなく現れては去っていく。

そんなことがどこにいても毎日のようにあるんだ。

あちこち、お宮や祠だらけで、「神さん」が看板を出している風情は、まるで八重山や東北の村を思わせる。

国境を越え、ニジェールにいます。

ぼくが持っているミシュランの400万分の1の地図には、一本の木が記されている。

400km四方、何も無い砂漠の真ん中に、たった一本立っていたアカシアの木。

1973年にトラックがぶつかって、この木を折ってしまった。

大昔、大森林だったサハラに残った最後の一本の木だった。

そこからさらに200km離れたところには、「恐竜の墓場」と呼ばれる化石の埋もれる砂丘がある。

サハラの森のかつての住人達。

いまはその辺りはとても美しい砂漠らしい。

トアレグクロスと呼ばれる21種類の美しい銀細工があります。

これはニジェールのトアレグ族の伝統的なお守りです。

昔は星をたよりに砂漠に行く時の方位計でもあったそうです。

みやげ物まがいの物は多くありますが、伝統を守る銀細工師は今も北部の砂漠地方にしかないようです。

サハラの町、アガデズまで北上しようと思います。

パスポートのページを増やしてもらいに行ったガーナの日本大使館で、日本の新聞を読んだ。

3週間も前のもので、ちょうどルクソールのテロが起こったときのものだった。

カイロにいた頃友人になった人達の中には現地で観光ガイドをしている人も多くいたんだ。

ルクソールでテロに逢い亡くなった人達のツアーを組んだ、その会社にみんなは所属していた。

友人が殺されていたかもしれないと思うと暗い気持ちになる。

新聞を読んでいたら、ああこんな風だった、日本の生活はこんなだったと、思い出した。

マリで病気をしていた時本気で帰りたいと思った日本は何なのだろう？

今も日本に帰りたい。

でも東京での暮らし、あんな不安でみじめな気持ちで送る生活を二度としたいとは思わない。

帰りたい気持ちだけは強くなるだろうと思う。

でもそれはどこへなんだ？

Nyame, NIGER

夢よりも深く目覚める場所へ。

∴

インガルという町にいます。ナイジェリア国境へ向かう中継地、アガデズへ戻る車を待ちながら、これを書いています。

インガルはアガデズから西へ約160kmのところにあるオアシスです。町の一部には地下水をくみ上げた水道がありますが、苦くて塩辛い、ひどい硬水です。

電気はありません。この町では、やたらと広い敷地の家を一軒借りて住んでいました。灯りも無いのに家が広すぎて落ちつかないので、部屋の中でテントを張っていました。

敷地の隅には、地面に穴を空けただけのトイレがあります。塀のすぐ外には大平原が広がっています。

用を足して立ち上がると、低い塀の向こうは、見渡す限り地平線です。

サハラのはらは、日差しこそ強烈ですが、冷たく乾いた風がびょうびょうと吹きすさびます。

いまはラマダンの最中です。日中だれも食事を摂らず水も飲みません。そんなわけで、マーケットにいくつかある屋台も日没からしか営業しないので、滞在中は木炭を買って自炊していました。

インガルの住人のほとんどはトアレグです。「青い種族」、あるいは植民地支配を受ける前は「砂漠の支配者」と呼ばれた人々です。

このあたりニジェールの北部一帯には、ボロロという遊牧民が住んでいます。求婚のダンスを踊るボロロの男性達の写真はとても有名です。オーネット・コールマンの「バージンビューティ」の、あの写真。しかし普通の彼らは、もちろんあんなアフリカの観光客が喜びそうな格好をしていません。男女共に黒づくめの服を着、女性は乱暴なぐらいの大きさのイヤリングを4、5個ずつもして、額とこめかみに刺青をしています。

インガルのマーケットにも毎日2、3人のボロロが買い物や家畜を売りにやってきます。異様な風貌で、一ヶ所に定住しない彼らは町では差別的な扱いを受けているのですが、ロバに乗って風のようにやってくるその姿は、遊牧民の名にふさわしい風格を感じさせます。

彼らの住んでいるところを訪ねようと2回出かけたのですが、2回とも失敗しました。遊牧民だけあって、どこにいるのかわからないのです。町にやって来る彼らに居留している場所を尋ねても、地名があるわけでもなく方位や距離や時間を測って移動しているわけでもない、はっきりしません。今度ここに来た時にはロバを1頭借りて、食料と水を持ち、彼らと一緒にいくことにしようと思います。しかしそんなことはまだ知る由も無かったので、ぼくは徒歩でボロロの集落を訪ねようと思いました。

ある日、顔見知りの少年にボロロはどこにいるの？と尋ねたら次々と地名を挙げるので、わかったわかった。で、明日はどこにいるの？と聞きなおしたら、それはアニオコンだ。と断言します。アニオコンは町の真北の方角に見える岩山です。よし、じゃあ行ってみようと、その翌朝、夜が明けてすぐに出かけました。

道ですれ違う人に尋ねると、確かにアニオコンはここから見えるあの岩山だと教えてくれます。でも、歩いていくつもりなのか？と、人が不安になるようなことを聞いてきます。しかし腕時計についた方位磁石を見て、ああ、それがあれば大丈夫だね。人に尋ねながら行けばいいよ。と、言ってくれました。ああそうか、人に尋ねながら行けばいいんだな、と町を出ました。

道はありません。ただひたすら広がる大平原です。町を出て30分も行くと、人影は全くなくなり、見渡す360度の地平線に自分一人です。次に一人の農夫を見かけるまで4時間、誰もいない平原を歩きました。いったいだれに道をきくんだ、と思いましたが、北へ向かって歩いて行くと、蜃気楼が揺らめく地平線の上に見え隠れしながらも岩山は近づいてきました。

歩き出して5時間を越えたとき、どうしようか迷いました。日没は6時半です。いま戻れば明るいうちに町に帰れますが、これ以上進んでから引き返すことになると、町に帰りつく前に夜になります。

すると、そのとき遙か向こうに人影が見えました。双眼鏡で見ると、インガルへ向かうトアレグの一家でした

話の途中ですが、少し厄介なことになりました。ぼくがここで、この手紙を書きながら半日待ち続けたアガデズへ向かう車は、実は朝の9時にとっくに出了ること！

次に入国するナイジェリアのビザの有効期限が迫っていることもあって、ぼくは2日前からこの辺にたむろしている親父たちに確認し続けていたんだ。アガデズ行きの車は今日の昼に出るんだねって。仮に今日は特別に朝出ることになったのだとしても、ほんの少しひき止めてくれても良さそうなものではないか。こんな小さな小さな町なのに。ナイジェリアのビザはこの辺りの国では取れない。明後日にアガデズを出るバスに乗れないとナイジェリア入国はむりだろう。そうなるこの先、陸路での旅行を続けられなくなる。みんなは、インシャ、アッラー（アッラーのみぞ知る）。明日は大丈夫だよって慰めてくれるけど、アッラーだけが知っていて、明日本当に車が来るかどうか誰もわからないなんて、そんなの全然大丈夫じゃない！

突然、何かをこらえきれなくなって、激怒した。そして、あきらめた。そうしたら今度はおかしくなってきた、爆笑した。アフリカなんだ。しばらくまともな交通機関が続いたから忘れていたけれどアフリカなんだ、ここは。すねたり怒ったりするのはとても簡単なことだ。自分の「あたりまえ」の限界の壁を無くすんだ。やわらかく、したたかにやっていくしかないんだ。ひどい移動手段しかない、ギニアやギニアビサオにいたときは、それがむしろ楽しかった。今回はビザの問題があるけれど、それでもなんとかなるだろう。明日、車が無ければ、自転車を買うか車を一台チャーターすればいい。（この町に車があればだが。）160km。一昼夜かければなんとかなるだろう。それでもだめなら、期限切れビザでも、ナイジェリアなら賄賂次第で入国させてくれるかもしれない。明日、一日あるんだ。

次の日です。昨晩は、とある日本人の家に泊めてもらいました。と、いっても家主は帰国していて留守でしたが。

昨日ここを発つつもりだったので、借りていた家は引き払い、荷物もまとめてしまっていたのでどうしようかと思案していたら、この家の留守番をしている管理人が、声をかけてくれました。

実はこのインガルに着いたとき、多くの人が日本語の単語を連発するので少し嫌な予感がしました。最初は、こんなところにまで日本人観光客がやって来ているのか、と呆れましたが、どうも様子が違います。彼らの知っている日本語の単語は、お決まりの「ひっかけ用語」ではなく、「タキビ」、「サムイ」、「カゼ」、などです。

話を聞いてみると、ここから北のアルリットという町でウラニウムが採れ、どうもその採掘に日本企業が関わったことがあるらしいのです。そして、それをきっかけにこの地を訪れ、恐竜の化石の魅力に取りつかれたのが、昨夜泊めてもらった家の主だということです。

荷物を解くのが面倒だったので、インガルに来て初めての夕食をしました。実は、自炊していたのを少し後悔してしまいました。ご飯がおいしいのだ。ナイジェリア人のおばちゃんがやっている屋台ご飯は、ごはんを豆にソースをかけた、アフリカでどこにでもある「洗面器ごはん」ですが、これがうまい。揚げたてのパンをスープに浸したものは、絶品です。また、家の管理人とその友人達との夕食にもお相伴にあずかったのですが、これも素晴らしいものでした。メインは相変わらずのぶっかけご飯ですが、生麩のようなものにスープをかけたもので、とてもおいしい。それに今朝ご馳走になった朝食。これは一体、何だろう？ 主材料は多分ミレット（あわ、ひえ）だと思います。クス

クスの食感と、カスタードクリーム＋ヨーグルト＋発酵させた酸味を、口の中でいっぺんに想像してもらえればかなり近いかな。あんまりおいしかったので洗面器に半分ご馳走になってしまいました。

さて、もう朝の10時です。今日、果たしてアガデズ行きの方は来るのかな。

ところで昨日どこまで話したっけ。

そう、それでこのまま進むと日暮れまでにインガルに戻れなくなるので、引き返そうか思案していた時に、トアレグの一家とすれ違ったんだ。（とはいっても、1 km以上離れていたけれど）

彼らにアニオコンの場所を聞いてみると、やはりあの目前に迫った岩山を指差す。岩山を越えたふもとに井戸があり、その向こうに川がある。そこがアニオコンだ。ひとしきりまくしたてた後に、オヤジが「ワカッタ？」と言った時は力が抜けた。地平線まで誰もいない大平原を5時間歩き続けた果てにやっと出会った遊牧民が日本語を話すのだ。このトアレグも以前日本の化石発掘チームに同行したことがあるらしい。

ここまで来て引き返すのも少し悔しい。それにトアレグのおやじは山の向こうで水が手に入るし、ポロロもたくさんいるよ、と言う。小さい揚げパンがあと4つ残っているし、水もまだ少しある。食べ物は向こうで手に入るだろう。ポロロの村で一泊してもいい。よし、行こう、と歩き出した。

1時間後、山のふもとについた。午後3時。7時間歩いたことになる。今すぐに引き返しても、もう日のあるうちには戻れない。岩山に登った。

頂上について唖然とした。向こうに見晴らしが開けるどころか、草一本ない真っ黒な溶岩の原がうねうねと続いているだけなのだ。

不安になりながら、山の反対側まで歩いてみようと思い、溶岩の山頂を歩き続ける。30分程歩いていくつかの峰を越えた時、おお！と声をあげてしまった。はるか何十キロ彼方まで、金色の砂地の大平原が広がっていた。見事だった。しかし、誰もいない。トアレグに教えてもらった川を探すと、確かに川の跡のようなものがあつたが、それは乾季の今は、枯れた藪が連なるただの砂地だった。あまり良くない状況だった。身の危険という、何となくまとわりつくような不安がひたひたと背中を登ってくる。双眼鏡あたり一帯を見てみると、地平線近くに一人の人間と家畜の群れが見える。彼らは地平線に向かっている。じきにその向こうに姿を消すだろう。これ以上進むのは、いい考えではなさそうだった。この先に村があるのか、そこにたどりつけるのか、何の保証も無い。

確かなことは、ここから徒歩4時間の範囲に人はひとりもいない、ということだった。

山の頂上の縁を歩きながら辺りを見ていくと、ふもとに井戸らしきものを見つけた。引き返すより仕方無いのだが、野宿することになっても火を起し水さえあれば何とかなるだろう。近づくと果たしてそれは井戸だった。深くても水面は見えないが確かに水音がしている。しかし、つるべがない。水はあっても、それをくみ上げるすべがないのだ。そうしているうちにも、日はどんどん傾いていく。

再び頂上まで登り、インガルの方向を双眼鏡で見ると軍の設備の鉄塔がかすかに地平線の上に見える。インガルに戻るにはそれを目指すしかないのだが、道の無い平原を歩くのだ。山の下に降りると鉄塔は見えなくなるし、インガルは小さな町だ。方向がずれると辿り付けないだろう。電気も無いから、日が暮れると町の明かりが見えることも無い。

それに、この遠足で初めて知ったことなのだけど、人は目標物がないとまっすぐに歩くことは出来ないのだ。まっすぐに歩いているつもりでも、磁石を見ずに5分も歩くととんでもない方向に向かっている。感覚は少しもあてにならない。もし仮に10度、歩く方向がずれると、町にたどりつく頃には8kmの誤差が出ることになる。この平原で夜、灯りも無い直径数百メートルの町を発見することは不可能だろう。

山頂から、地平線にかすかに頭を出している鉄塔を眺め、方位磁石で方向を見定める。真南から西へ10度。午後4時に山を出発する。日没まで2時間半。休憩を最小限にしても7時間は歩く。はたして夜歩けるものなのかどうかかわからない。ともかく、日のあるうちに距離をかせごとと歩き出す。

だだっ広い平野を歩くのは心細い。数十キロ四方の密室にひとりであるようだった。

ともあれ急いでどんどん歩き、6時半に日没。東の空に星が見えはじめ、西の地平線に日が沈む。休憩。揚げパン一個を残し、食べる。あたりはすぐに闇につつまれる。

昨夜はすごいような月夜だったが、月はまだ出ない。月が出るのは、何時になるかわからないので歩き出す。懐中電灯も持っていたが、マリ製の電池は恐ろしく貧弱で、とても暗い。

しかし歩きだして気付いたのだけど、方角に関しては夜の方がよほどわかりやすい。一度正確に方角を定め、星をひとつ決めてそれを目指して歩く。そうすれば何度も方角をチェックしなくて済む。もちろん星は少しずつ西へずれるが、30分に一回ぐらいのチェックで十分だった。

空では凄まじい量の星が、話にも聞いたことのないような世界を映し出していた。

西の空には太陽の残照が地平線から天頂へと青白く立ち上り、北西から南東にかけての天球には、ピロードのような天の川が掛かる。東の高い位置には巨大なオリオン座。そして、星明り。辺りは全くの暗闇ではなく、星の明かりが、藪や地面の凹凸をかすかに浮かびあがらせていた。

すでに体が痛かったが、昼間のペースを落とさずに歩き続けた。夜になると、しんしんと冷え込み始め、風は吹きすさぶが、それでも歩く。

午後8時に休憩。少し無理がかかってきたようだった。12時間以上歩いていた。日没後、暗闇を歩きだして1時間経っていた。

その場に座り込む。どこまで歩いたのかわからない。座ったとたんに体がすう、と冷えていく。心地いい眠気に吸い込まれて横になる。もしここで死んだりしたら、まず発見されないだろうな、などと思いながらしばらくまどろむ。やっぱり、帰ろう。と、地面からぱりぱりと体を引き剥がして立ち上がる。

それから1時間後、吹きすさぶ風の音に混じって、人の声が聞こえたような気がした。アザーンのようだった。もうしばらく歩くと、今度ははっきりとアザーンが聞こえた。インガルではラマダンの期間だけ夕刻の礼拝時に発電機を回し、拡声器を使ってアザーンの朗唱をしていた。そのアザーンが聞こえたのだった。

どうやら迷子にはならず済みそうなのがわかったので、ひと心地つくことにした。地面は石ころだらけの上に、足の裏にはまめができて痛くて歩きにくい。早く月が出てきて欲しかった。轟々と吹きすさぶ冷たい風に、千切れるようにかすかなアザーンが聞こえてくる。そうしているうちに、だんだんと東の空がほのかに明るみ出す。待ちわびた、月だった。

東の低い空に浮かびあがったわずかな明度が、徐々に地平線の全周へ広がっていく。やがてそれは、西の空に残っていた太陽の残照よりも強くなっていく。そしてゆっくりと、しかし確実に、東の地平線上の一点へと、明るさが集中していく。

そして、出たのだ。天空にびっしりと敷き詰められた満天の星を、嘲るようにかき消しながら、地平線から、巨大な、真紅の満月が現れた。

あれを言い表すどんな言葉も、ぼくは思いつかない。オーネット・コールマンの曲に"Midnight Sunrise"というのがあがあるが、いまぼくが見ているものはそれだった。

天空の運行。それは本当にあまりにも巨大だった。永遠に触れることのできない謎のように巨大だった。死と再生の夜と昼。太陽の夜の航海を、ぼくは見ていた。

また歩き始める。月が出れば昼間歩くのとそう変わることは無い。

しばらく歩き、ふと見上げると、あの鉄塔がぼくのすぐ左手に立っていた。なんのことはない。ぼくはもう町の端に着いていたのだ。

インガルの町に入ると、我が家はすぐそこにあった。

さらに朗報がある。午後4時にアガデズ行き車が着いた。インガルを出てアガデズに着いたのは夜の7時になった。そのまま真っ直ぐ、友人になった銀細工師の家へと向かう。翌朝アガデズを発つので、彼にもう一度会っておきたかった。

彼、イスフは初めて会ったときと同じように静かに微笑みながらぼくを迎えてくれた。物静かで礼儀正しく、たたずまいの美しい彼を見ていると、例えば中世の日本の刀鍛冶とはこのような人物だったのではないかと、つい想像してしまうのだ。

彼の手になる作品を分けてもらい、別れた。

いまは、その翌朝。ナイジェリア国境へと向かうバスの出発を待っている。

もうすぐ乗車が始まるだろう。また知らない町の、知らない人々と会うのだ。

もうすぐ、旅に出て二回目の誕生日が来る。

幸せなんだ。ほんとうに、どうしようもなく幸せなんだ。

Agadez, NIGER